

平成 30 年度 事前復興フォーラム

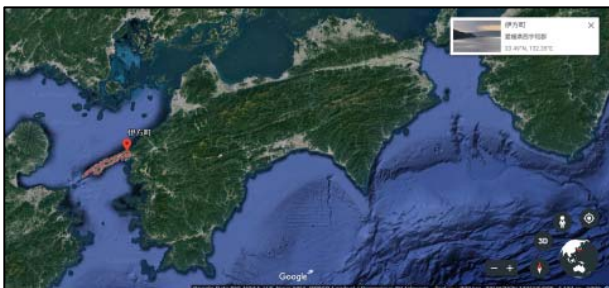
学生が考える宇和海沿岸域の 小さな事前復興プラン 発表

東京大学（伊方班）

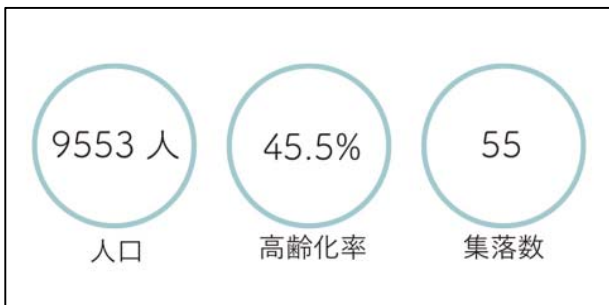
「55 集落がつなぐ佐田岬十三里」



愛媛県の西端に張り出した 40km 弱の半島が佐田岬半島で、その全域が今回発表させていただく対象地区になります。

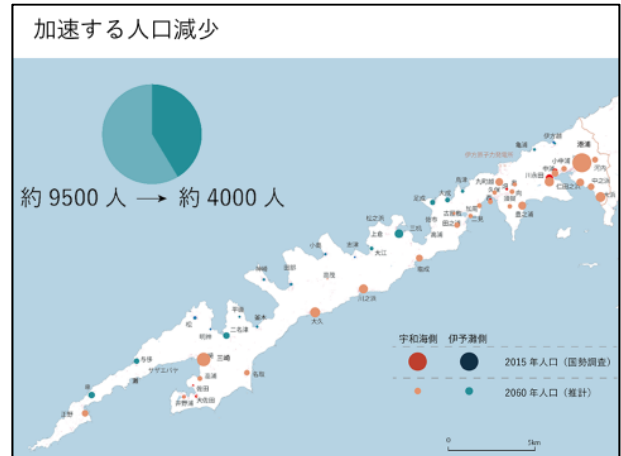


人口約 9500 人，高齢化率は 45.5%と高齢化が進んでおり，55 の集落に分かれています。

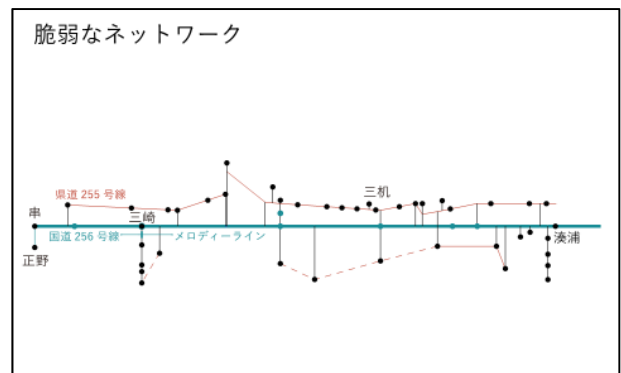


現在では 55 の集落に散らばって、このように人口が増幅しておりますが、これが 2060 年になると 4000 人，現在の 1/2 以下になるという風に推定され、人口が 1 桁になる集落もあります。これまでと

は違う暮らし方を考える必要に迫られています。



佐田岬半島は約 40km あり、たくさんの集落があるため交通のネットワークが非常に重要になります。かつては船が使われていましたが、現在は半島内での導線というのは国道が大きな役割を占めており、実際に集落のネットワークがどのようになっているのかというのを示したのがこの図になります。このようにすべての集落の距離とつながりを見ると、一見しっかりとつながっているように見えますが、実際にメインの道路である国道と接続している集落に絞ってみるとこれだけになります。最寄りの国道にたどり着くまでに細い山道を抜けていかなければならないという集落が非常に多いということになります。現在、日常生活の中でも集落同士の関係というのは非常に薄くなっています。

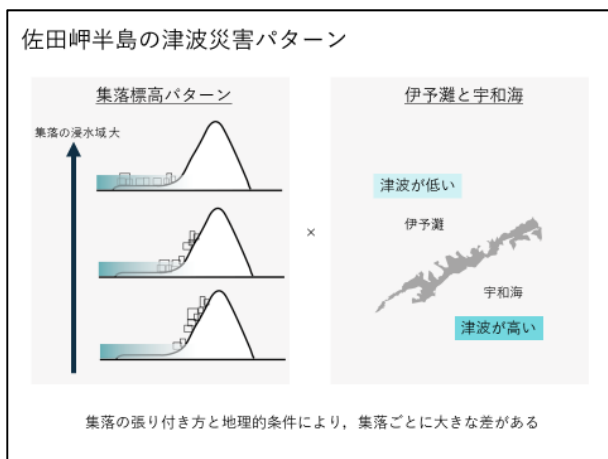


また、昨年夏の豪雨災害は記憶に新しいところですが、伊方町でも土砂災害が起こっており、例えば平磯（ひらいそ）という集落では住民の方々が自力で復旧作業をされたというブログを書かれた方がいらっしゃいます。ネットワークの数が少ないと災害時に被害を受けた時に、すぐに救助が来るわけではなくて自分たちで何とか過ごさなければいけないという期間が長くなるという風に考えられます。特に伊方は山が多くて、どこが崩れるかがすぐには分から

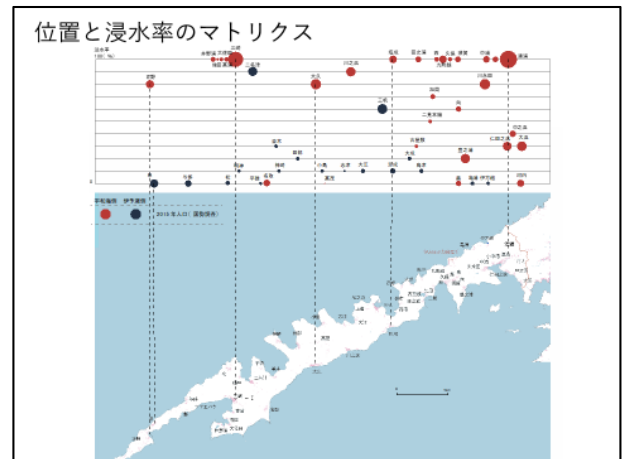
ないため、1 つだけのつながりに頼っているのも意識とも言えます。



ここで今回のテーマとなっている南海トラフ地震に備えるということを考えてみたいと思います。佐田岬半島は中央に向かって山になっており、その南北で二つの異なる海に面しているという点が特徴的です。その山のどのあたりに集落が位置するかということや、低い土地をどれくらい含むかということによって集落ごとに津波でどれくらい被害を受けるかというのは変わってきます。また、宇和海と伊予灘どちら側に面するかによって被害の状況というのは大きく異なっていて、おおまかにいえば南側の宇和海で津波が高いということになります。



さらに各集落について詳細に見てみると、横軸が集落の位置で縦軸が浸水率になっています。上に行くほど浸水率が高い集落だということになります。赤い円が宇和海、青い円が伊予灘側で円の大きさが人口の大きさを表しています。このようにみると、南北関係にある集落というのは、大きく津波の被害の状況が異なるということや人口が多い集落ほど浸水率が高いところが多いということがお分かりいただけると思います。



こうした 55 の集落は、それぞれ漁港、自力での暮らし、独自のお盆の行事、石積みの技など鮮やかなアイデンティティ、個別の良さを持っています。一方で、先ほど紹介したとおり人口減少が進んで、そのアイデンティティが失われつつあります。また、災害リスクにさらされているということは、一度災害が起こるとそれらが一気に失われる可能性が高いということでもあります。これらの状況を踏まえて、私たちがコンセプトとして、アイデンティティ、個別の良さを引き継ぐ暮らし方を提案します。



これは 55 集落のアイデンティティが形を変えても引き継がれていくということです。形を変えてもというのは、例えば今の住民が全員住み続けなくても、集落がその良さを持ったままあり続けることを重視するということです。この実現のために、3 つの方針を立てています。

アイデンティティを引き継ぐ暮らし方

55 集落のアイデンティティが
形を変えても引き継がれていく

まず、モノと人とのネットワークを作っていきます。現在のように1つの中心となるような街だけを通して広がっていく形ではネットワークが弱くなっていきます。道路だけでなく、生活の中で人間の動きを作っていくことで、集落がネットワークを形成し、様々な形でつながっていくように整えていきます。

1 モノと人のネットワークを作る



一つの集落から広がるのではなく、集落が様々に繋がる

次に、集落のアイデンティティ、個別の良さからそれぞれの集落が持つべき役割というものを見出していきます。住宅でもいいし、漁業かもしれないし、観光の拠点になるかもしれないといった様々な役割がありえ、集落がたくさんあるからこそできる、伊方町だからこそできる場所の使い方を提案していきます。

2 集落の役割に応じて空間を作る

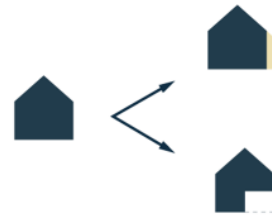


集落のもつ良さや特徴を取り上げる

最後に、人口が少なくなっていく今、新しく大きいものを作るというのではなく、今あるものを生かす

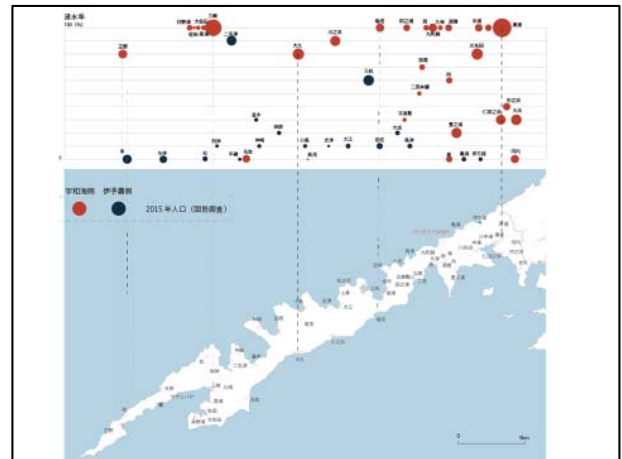
ことをルールとして守りながら、すでにある建物や空間に小さな工夫を加えることで将来の姿に合うような空間を作っていきます。

3 今あるモノを生かす



既存の建物や空間に小さな操作を加える

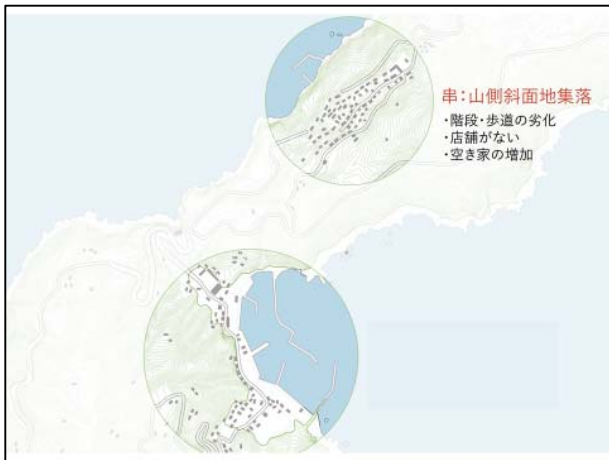
次に、串ー正野（くーしょうの）の提案を行います。佐田岬半島先端に位置し、浸水率の異なる串・正野集落を例に提案を行います。



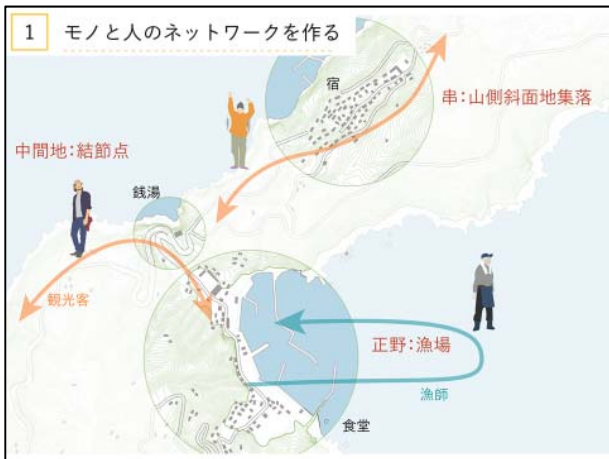
正野の集落には古くから続く、佐田岬漁港があり、今でも漁民の多くは漁港権を持ち、漁協は人々の生活と密接にかかわった正野の生活の一部です。しかし、一方で、生活の中心部のほとんどは津波の浸水域で、海から逃げる道は1つしかありません。



集落は急斜面に形成された美しい集落を持ち、住居の連なる美しい景観が串のアイデンティティです。その一方で、補整活動の老朽化、店舗の現象、空き家の増加など居住基盤に問題があります。



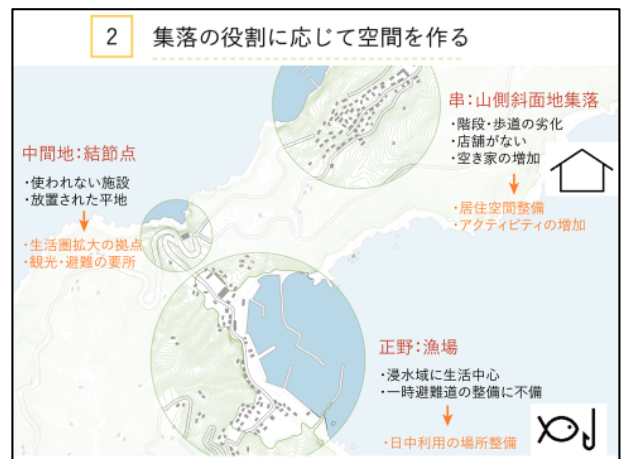
正野の漁協，串の集落を確保してモノと人のネットワークを作ります。平常時，住人は正野で働き，串に家を持つことで2つの地域にも住むことになります。中間地には2つの集落を結びつける結節点としての施設を作ります。また，美しい景観や漁業を観光資源として生かし，2つの集落に観光客を呼び込み，活性活動を行います。



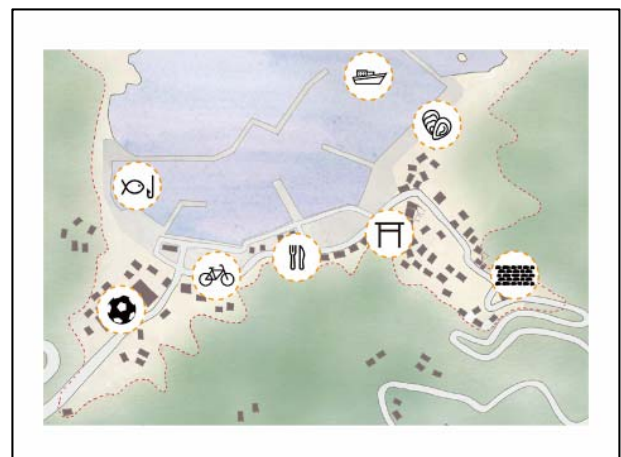
災害時には整えていた道路が避難道路となり，中間地は一時避難場所となります。なじみのある串集落にみなし仮設を設置し，正野の近くで通いながら復興を進めることができます。正野は観光漁協などを中心に素早い復興を目指します。



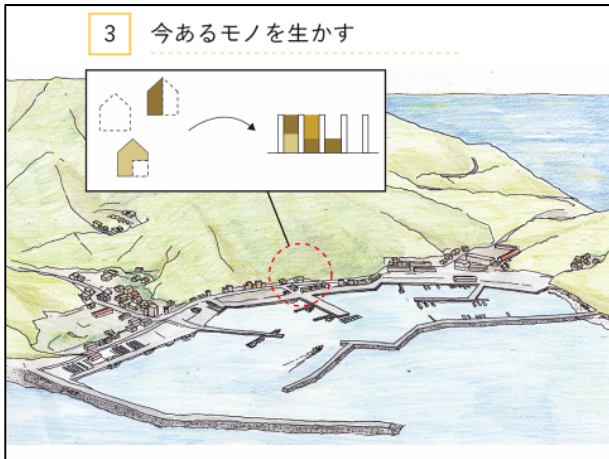
正野は漁協共有アイデンティティから仕事場，遊び場として整備し，日中利用の場所とします。串は伝統的な集落形態が残る魅力的な景観から，居住空間として整備し，アクティビティの増加をはかります。中間地点は使われなくなった施設を再利用し，平地を観光・避難の要所として整備します。



次に詳細な計画です。正野は仕事場・遊び場としてのアクティビティが集落内に点在するようにします。



また、減築などを行って、事前に災害のリスクを減らすとともに、そこで出た材を再利用し、食堂小屋などを建てます。



住民である漁師が使う食堂は同時に観光客がお昼を食べる場所にもなり、

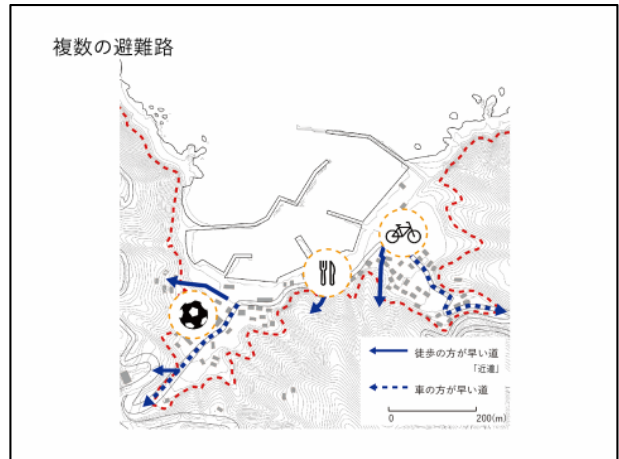


佐田岬サイクリングロードの通過地点にある付近にはレンタサイクルの分店を置くことで、サイクリングの拠点としたりします。



避難路は車避難が想定された1つの県道だけでなく、神社の裏山などなじみのある旧道を避難道とし

て、複数整備します。正野と串の中間地には、閉店したレストラン「漁師物語」の平地があるので、正野と串をつなぐ結節点として整備します。



日常時は予備倉庫、銭湯を設置することで串ー正野のお互いの行き来を促し、そのほかの地域とのつながりの結節点とします。



災害時は一時避難場所、平地は仮設住宅の要地として利用します。



レストラン「漁師物語」のリノベーションを行い、

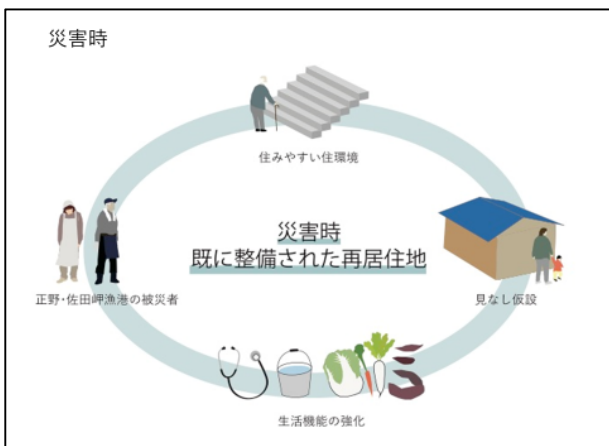
串ー正野集落や観光客の憩いの場とします。漁具倉庫を作り、その収蔵品を観光客が見られるようにすることで、季節ごとの漁業の営みを観光資源として活用します。



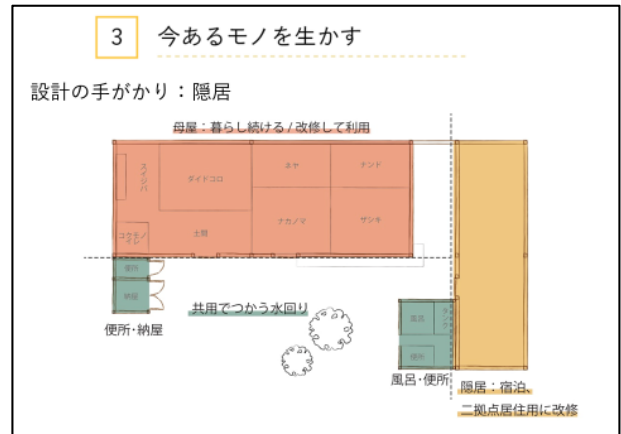
斜面の中腹に位置する串集落では老朽化した生活基盤や空き家を整備し、生活基盤を強く、居住機能を高めます。



災害時には平時から生活基盤を向上させておくことで、正野佐田岬の被災者にとって、すでに整備された再居住地の予先ともなります。



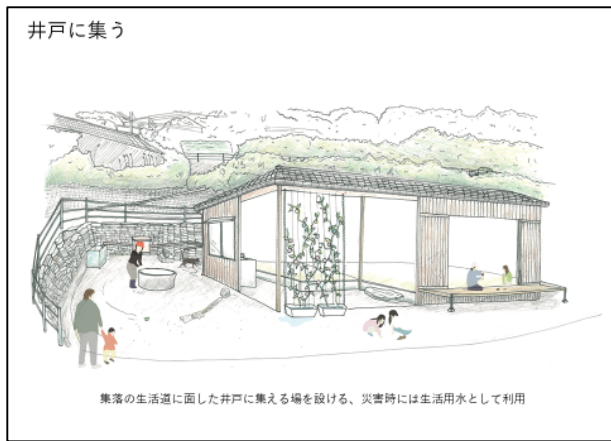
また、南予地域には隠居の風習があり、住み替えや増減築が日常的に行われてきました。串の伝統的な家のプランは、母屋、隠居屋、共用でつかう水回りからなります。今回は事前復興として、この伝統的なプランと住み替えを利用し、増改築することで、観光利用、二拠点居住、みなし仮設など柔軟に使いこなすことを提案します



井戸や主要な施設の立地から、それぞれの空き家に役割を与え、改築，新築を提案します。



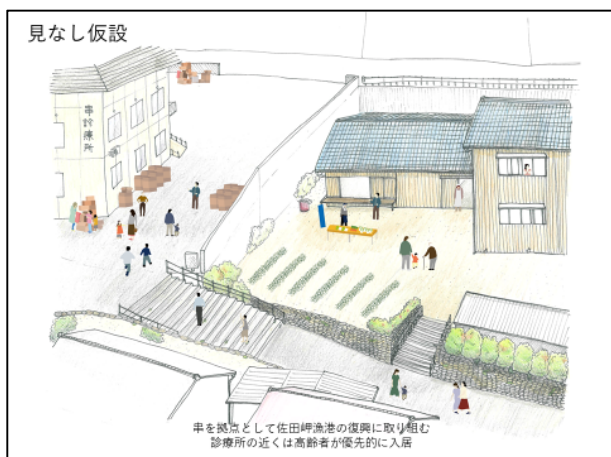
例えば集落の生活道に面した井戸の隣に地域住民が集える場所を設け、井戸は災害時に生活用水として利用できるようにします。



母屋はこれまで通り住む場所とし、隠居部分を商店として改築します。商店は二拠点居住やの働く場となったり、週末や定休日にはお茶会やサークル活動などを行います。

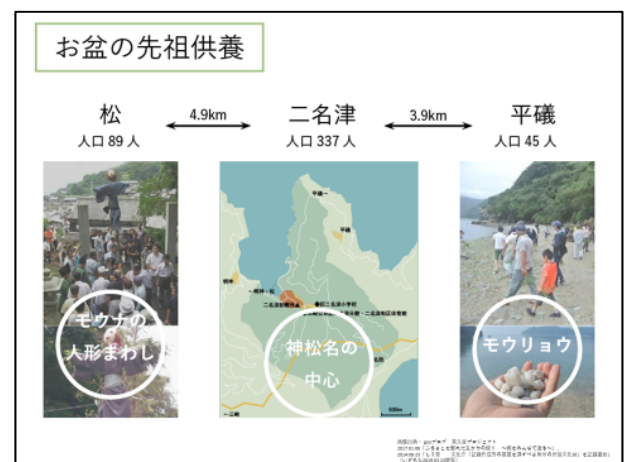


災害時には改修しておいた“みなし仮設”として利用します。診療所の近くの空き家は正野から避難してきた高齢者を優先的に住まわせます。このように正野集落の人々はなじみのある串に住みながら、佐田岬漁港の復興に取り組むことができます。以上のように、災害リスクの異なる串も強化し、連動作成整備することで事前復興を行います。



今回は、串と正野という2つの集落だけを取り上げましたが、他にも集落があり、これらについても繋げていくことを考えています。少しでも紹介させていただきます。

例えば、お盆の先祖の供養の行事に関してです。松、平磯という集落ではそれぞれ特別なお盆の行事があります。しかし、こちらのどちらも集落の人口が減ってきていて、ここだけでは将来的にはもしかしたら保っていくことが難しいかもしれません。その時に旧神松名村（旧かんまつな村）の中心であった二名津（ふたなづ）のところで居住空間を整備していくことによって、時々訪れる場所としてだけでも、持たせていくということを考えています。



また、佐田岬半島全域には美しい石垣が広がっており、これらを繋げて観光資源としていくことで、そして55集落全体をつなぐことで、実現できる佐田岬十三里としての伊方町という提案をしていきたいと思っています。

